

勅撰集と本歌取り (二)

はじめに

古歌の詞を包摂することによって、情趣の複雑化を企図せんとする和歌修辭法、すなわち本歌取りは、平安朝末期から盛んに行なわれ、『新古今集』において、最高の芸術的效果を挙げ得ている観があるが、それにつづく『新勅撰集』以下の十三代集においても、変ることなく、——質的量的変化は認められるけれども、——行なわれてきた。『新古今集』の本歌取りについては、小島吉雄博士が「本歌取りと新古今和歌集」(『新古今和歌集の研究』所収)において詳細に説かれ、『新勅撰集』以下『新後撰集』に至る勅撰集については、拙稿「新勅撰集と本歌取り」(『樟蔭国文学』第十号所収)、「勅撰集と本歌取り(一)」(『樟蔭国文学』第十三号所収)において、考察を加えておいた。この小論は、それにひきつづいて、『玉葉集』『純千載集』『純後拾遺集』『風雅集』『新千載集』『新拾遺集』『新後拾遺集』『新統古今集』における本歌取りを調査したもので

西 畑 実

ある。いうまでもなく、『玉葉集』『風雅集』は京極派系統の撰者の手になるものであり、その他の勅撰集は二条派もしくはそれに準ずる者によって撰進せられているのであるが、この調査によって、歌風の相違がそのまま本歌の取り方の差異となつて現われており、それに加えて、撰者の好尚も色濃く反映している事実が明らかになるであろう。

1

この調査に採り上げたのは、勅撰集ないしは私撰集の歌であれ、物語の歌であれ、古歌を本歌に取っているものに限り、催馬楽に拠るものや漢詩や本説を踏まえたものは対象にしていなことを、まづお断りしておく。そこで、『新古今集』以下の勅撰集における本歌取りの歌の総歌数に対する百分比を求めてみると、次のとおりである。

『新後拾遺集』『新統古今集』における本歌取りを調査したもので

歌集名	本歌取りの歌	百分比
新古今集	二七〇首	一三・六%
新勅撰集	二四〇首	一七・七%
続後撰首	一四八首	一〇・八%
続古今集	二六一首	一三・五%
新後撰集	一六六首	一〇・三%
玉葉集	七八首	二・七八%
続千載集	一六六首	七・七三%
続後拾遺集	一二四首	九・一五%
風雅集	九〇首	四・〇二%
新千載集	二三五首	九・九四%
新拾遺集	一七八首	九・二七%
新後拾遺集	一六四首	一〇・六%
新統古今集	二八〇首	一三・一%

(註)

この統計によれば、十三代集の嚆矢たる『新勅撰集』における本歌取りの比率がもっとも高く、『玉葉集』のそれはもっとも低く、『風雅集』も『玉葉集』について低い。また、『続古今集』および『新統古今集』の比率が『新古今集』のそれにもっとも近いことも

ある。

注意を引く。これは、『続古今集』と『新統古今集』とが、その名の示すがごとく、『新古今集』を範としているらしいことの統計的証拠であり、『和歌文学大辞典』の説くように、「歌風は概して平淡であるが、さすがに新勅撰集・続後撰集に比べて優麗な趣を湛えた歌が少なくない」「続古今集」、「幅があり、生氣のある作品もある」「新統古今集」の歌風と密接な連繋があるように思われる。しかし、もっと重要なのは、京極派の撰集たる『玉葉集』と『風雅集』とにおいて、本歌取りの手法を駆使した作品がきわめて少ないということである。これは、両勅撰集の歌風を考察するうえに見逃し得ない統計的事実であろう。

2

では、『玉葉集』以下の勅撰集における本歌の出典を述べることにする。

玉葉集

万葉集二首 古今集四二首 後撰集六首 拾遺集一首 金葉集一首 新古今集九首 新勅撰集一首 伊勢物語一首 (計七四首)

続千載集

万葉集四首 古今集八六首 後撰集四首 拾遺集九首 後拾遺集三首 詞花集一首 千載集二首 新古今集一七首 新勅撰集四首 伊勢物語一首 源氏物語四首 狭衣物語一首 和漢朗詠集一首 (計一三七首)

続後拾遺集

万葉集七首 古今集七二首 後撰集六首 後拾遺集一首 金葉集一首 詞花集一首 千載集二首 新古今集一〇首 新勅撰集二首 古今和歌六帖一首 伊勢物語三首（計一〇六首）

風雅集

万葉集二首 古今集五十二首 後撰集六首 拾遺集六首 後拾遺集二首 詞花集二首 千載集二首 新古今集六首 新勅撰集二首 古今和歌六帖一首 源氏物語四首（計八五首）

新千載集

万葉集二一首 古今集一一八首 後撰集九首 拾遺集一七首 後拾遺集四首 千載集四首 新古今集一八首 新勅撰集八首 伊勢物語二首 源氏物語一首 和漢朗詠集二首（計一九四首）

新拾遺集

万葉集二首 古今集九二首 後撰集八首 拾遺集一三首 後拾遺集六首 金葉集一首 詞花集二首 新古今集一八首 新勅撰集四首 源氏物語二首 和漢朗詠集一首（計一四九首）

新後拾遺集

万葉集六首 古今集八三首 後撰集一〇首 拾遺集二二首 金葉集一首 千載集一首 新古今集一二首 新勅撰集二首 続古今集一首 伊勢物語三首 源氏物語二首（計一三三首）

新続古今集

万葉集六首 古今集一四一首 後撰集八首 拾遺集一五首 後拾遺集三首 詞花集一首 千載集一首 新古今集一八首 新勅撰集

三首 続古今集二首 伊勢物語五首 源氏物語四首 狭衣物語一首 和漢朗詠集一首（計二〇九首）

これによれば、どの勅撰集も『古今集』の歌を多数本歌にしているように見える。ここに、『古今集』の歌以外で本歌になっているものの、総歌数に対する百分比を算出してみると、『玉葉集』四三パーセント、『続千載集』三七パーセント、『続後拾遺集』三二パーセント、『風雅集』三八パーセント、『新千載集』『新拾遺集』おのおの三九パーセント、『新後拾遺集』三八パーセント、『新続古今集』三三パーセントということになる。ところが、『玉葉集』は『古今集』の歌を本歌に取ることがもつとも少ない。いわば、『古今集』離れの現象を呈している。いかなる集の歌を本歌に取るかという点においても、二条派の保守的な歌風を排しようとする『玉葉集』の撰者の革新的な姿勢が窺えよう。しかるに、同じく京極派の撰集でありながら、『風雅集』は、この点に関する限り、二条派の撰集とほとんど径庭が認められない。玉葉風雅と併称されているにもかかわらず、本歌取りに関して、微妙な差異が看取できる。

3

さて、今度は、『玉葉集』以下の勅撰集において、一回以上本歌に取られている歌を列挙してみよう。（括弧内の数字は、本歌取りの回数である。）

(二〇) よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねのし

ら雲（読人しらず）

（一八）おほかたは月をもめでじこれぞこのつもれば人のおい
となるもの（在原業平）

（一八）世の中はなにかつねなるあすかがはきのふのふちぞけ
ふはせになる（読人しらず）

（一八）きみをおきてあだし心をわがもたばすゑのまつ山浪も
こえなん（読人しらず）

（一七）さむしろに衣かたしきこよひもや我を待つらん宇治の
橋姫（読人しらず）

（二三）ありあけのつれなくみえし別れよりあかつきばかりう
き物はなし（壬生忠岑）

（二三）あまのすむさとのしるべにあらなくにうらみんとのみ
人のいふらん（小野小町）

（二二）さつき待つ花たちばなのかをかげ昔の人の袖のかぞ
する（読人しらず）

（二二）人しれぬわががよひぢのせきもりはよひよひごとにく
ちもねなん（在原業平）

（二二）月やあらぬ春やむかしの春ならぬわが身ひとつはもと
の身にして（在原業平）

（二一）山ざとは冬ぞさびしさまさりける人めも草もかれぬと
おもへば（源宗干）

出典をいえば、二〇回取られている歌は『新古今集』からで、そ
れ以下の歌はすべて『古今集』から出ている。小島博士の御研究に

（二〇）よそにのみ見てややみなむ葛城や高間の山のみねのし

従えば、『新古今集』においては、「さつき待つ」の歌が一〇回、
「月やあらぬ」が七回、「さむしろに」が六回、「きみをおきて」、
「世の中は」がそれぞれ三回本歌に取られている。また、『新勅撰
集』においては、「世の中は」、「ありあけの」が三回、「おほかた
は」、「きみをおきて」が二回、「月やあらぬ」が一回本歌になっ
ている。さらに、『続後撰集』から『新後撰集』に至る勅撰集にお
いては、「ありあけの」が一六回、「きみをおきて」、「世の中は」
がおのおの二回、「よそにのみ」、「おほかたは」、「さつき待つ」
が七回、「月やあらぬ」が六回本歌とされている。

『新古今集』と『新勅撰集』とにおいて、どういふ歌が頻繁に本
歌に取られているかという点に関しては、たしかに両者に非常な懸
隔があり、歌風の差異と深い関連があることは、「新勅撰集と本歌
取り」において述べたごとくであるが、それ以下の勅撰集において
は、本歌取りの問題に絞っていえば、『玉葉集』『風雅集』の場合
は、しばらく措き、大同小異であって、そこに撰者の好みが見えるもの
の、特にとりたてていふべきほどの特色は認められないようである。
ただ、本稿における本歌取りの数量的調査においては、紙幅の関
係から、本歌取りにもっとも親炙していた新古今歌人と、後世の歌
人、すなわち、本歌取りに対してあまり積極的ではなかった二条派
の宗匠の影響下にあった歌人、新古今以後の新風を樹立した為兼の
指導のもとに、清新な歌風を開拓していった京極派の歌人との間に
区別を設けなかったがために、こぼれ落ちた部分があることは否め
ないけれども、とにかく、「あまのすむ」といふ歌が一三回、「人

しれぬ」が一二回、「山ぎとは」が一回本歌になっているところに、歌人ないしは撰者の風尚が時代的に推移していることを知るることができるであろう。

「さつき待つ」や「月やあらぬ」の歌は、小島博士の説かれるように、たしかに「小説的連想を伴ひ易い」、「綿々たる懐旧の情に溢れた」歌に違いない。また、「おほかたは」、「世の中は」の歌も感傷的で、「人生詠歎的内容の歌」ではある。しかし、もっとも多く利用せられている「よそにのみ」の歌は、深い余情に溢れてはいるけれども、平淡美の歌であり、さらに、「ありあけの」の歌は、優美ではあるが、巧緻な作品で、新勅撰歌人の好むところであり、「あまのすむ」に至っては、技巧を駆使して、趣向の目立つ典型的な古今調の作品である。後代の歌人がこのような作品をも多く本歌に取っていることは、本歌取りの消長を考えるうえに、見逃してはならぬ事実であろうと思われる。

4

なるほど、後世の歌人たちも在原業平の歌を好み、それを本歌にしている。しかし、新古今歌人のごとき余情妖艶の体を詠むことができなかった。また、紀貫之に鋭く代表される知的な歌を本歌に取りながら、新勅撰歌人のごとき有心美の体をも形象化し得なかった。かれらが残しているのは、平淡美という隠襲に隠れた平凡かつ平板な歌であった。その力量をもってしては、情趣を複雑にするは

ずの本歌取りの手法も、二三の例外を除いて、すぐれた芸術的効果を挙げるに至ってはいない。二条派の撰集に残されているのは、形骸化された本歌取りの残骸のみである。

橘のほふあたりのうたたねは夢もむかしの袖の香ぞする〔新古今集〕俊成女)

面影のかすめる月ぞやどりける春や春の袖の涙に(同)

これらはいうまでもなく、「さつき待つ」、「月やあらぬ」の歌を本歌にしているが、前者は「妖艶の美をもった感覚的な歌」(安田童生博士「新古今秀歌」)となっており、後者は「妖艶の美のたちこめる中に、物語的な浪漫性」(同)のある歌となっている。ところが、後世の歌人は、同じ歌を本歌に取りながら、

たが袖の名残をとめて橘のむかし菱らぬ香ににほふらむ〔新拾遺集〕俊定)

後はみな忍ぶならひの橘にいまそへ置かむ袖の香もがな〔新後拾遺集〕為重)

老が身の春やむかしの友とみむ霞みなはてそ夜はの月影〔続後拾遺集〕為世)

めぐり逢ふ春や昔のもの身と月だに知らじ墨染の袖〔新千載集〕向阿法師)

程度の作品しか残し得ていないのである。ただ本歌の詞を裁ち入れているのみで、迫力や新鮮味の乏しい作であり、俊成卿女の取り方が立体的であるのに対して、後代の人々のは平面的で、起伏に乏しい。結局は創作主体の態度如何に帰せられるのであるが、平淡美を

平坂な歌であった。その力量をもつてしては、情趣を複雑にするは

唱導した為家を始めとする二条派のもとにおける本歌取りの末路はかくのごときものであった。すでに、本歌取りの手法は、おのが乏しい創作力を糊塗する手段にまで墮落してしまっていたのである。しからば、『玉葉集』および『風雅集』における本歌の取り方はいかかであるか。以下それについて考察してゆくことにしたいと思ふ。

5

前に述べたごとく、十三代集中、『玉葉集』はもつとも本歌取りの歌に乏しい。また、本歌取りの作を残しているのも、多くは前代の歌人であつて、——古歌に本づいた藤原定家の作が五首撰入せられてゐるのが注目されるけれども、——京極派の歌人に至つては、撰者の為兼に本歌取りの歌が一首もなく、代表的歌人としては、伏見院、従三位為子のおのおの二首、西園寺実兼一首といったところである。

とまるべきかたやいづこにありま山宿なき野辺の夕暮の雨（伏見院）

これは、『新古今集』の「しなが鳥猪名野を行けば有馬山ゆふ霧立ちぬ宿はなくして」（詠人しらす）からの本歌取りであるが、本歌の情趣を巧みに包摂しながら、旅に行き暮れた夕暮の寂寥感を形象化し得ている。二条派の歌人の本歌取りの作に多く見られることき、古歌の詞を単に上下に置き換える程度の低い次元にとどまるこ

い。結局は創作主体の態度如何に帰せられるのであるが、平淡美を

となく、立体的な構成になっているところに、新古今的な本歌取りに通うところが認められるが、また、それとは微妙に異なる点もあるといえよう。

われのみぞもとの身にして恋ひしのお見し面影はあらぬ夜の月（従三位為子）

この歌の本歌が、かの業平の「月やあらぬ」の作であることはいうを俟たない。本歌の詞にすぎりながら、新しい美的世界を構築している。つまり、本歌を取ることによつて、「小説的な境遇を設定」（『和歌文学大辞典』）するのに成功しているのであつて、これも新古今的な取り方の復活と見られなくてはならない。しかし、畳みかけるような調べ、屈折した心理描写など、『新古今集』のそれとも異なつた点が目にとまるのであつて、いわば、玉葉的な本歌取りの手法が確立されていると見做してもいいのではないかと思われる。

咲きやらぬ籬の萩の露をおきて我ぞ移るふももしきの秋（伏見院）

矢田の野や夜寒の露のおくなべに浅茅色づき男鹿鳴くなり（為子）

夜よしとも人には告げじ春の月梅さく宿は風にまかせて（実兼）
これらの本歌取りの手法も、二条派のそれとは異なつて、きわめて清新である。本歌取りの歌の数こそ少なけれ、為兼によつて推進された『玉葉集』の新風は、また、本歌取りの手法にまで及ぼされている観があるのである。それでは、京極派の第二の撰集たる『風雅集』における本歌取りの実体はどうであろうか。次にそれを見て

行くことにしよう。

6

『風雅集』は、『玉葉集』について本歌取りの歌を収めることが少ない。『玉葉集』に比すれば、『風雅集』の撰集態度が現代に重点をおいているところから、京極派歌人のそれがやや増加してはいるものの、依然として前代の歌人の方に比重が傾いている。古い時代の歌人として重んぜられている定家に九首、為家に四首、後鳥羽院に三首、本歌取りの歌が見えていることも注目し得ようが、現代の歌人としては、撰者の光厳院に一首の本歌取りの作もなく、花園院に一首、二条為基に二首といったところがめぼしい状態で、『風雅集』においても、京極派の歌人に本歌取りの歌が少ないのは、『玉葉集』とほぼ同様である。

やぶしわかぬ春とやなれも花の咲くその名もしらぬ山の下草

(花園院)

これは、『古今集』の「日の光やぶしわかぬばいそのかみふりにしさとに花もさきけり」(布留今道)から構想を得たものであるが、本歌の詞を巧みに利用しながら、匂うような自然観照の眼の底に、閑寂の美を見出そうとしているところに特色がある。かような本歌の取り方は、まさに玉葉的なそれに等しく、というよりも、それをさらに一步押し進めたものとさえ思われ、まさしく風雅集のものとなっているということができよう。かように、本歌の詞をひと捻り

して取る手法には、次のような例もある。

ぬるがうちにみるより外のうつつさへいやはかななる夢に成り
ぬる(為基)

『古今集』の「ぬるがうちにみるをのみやは夢といはんはかなきよをもうつつとはみず」(壬生忠岑、同じく「ねぬる夜の夢をはかなみまどろめばいやはかなにもなりまざるかな」(在原業平))の二首によりながら、本歌の詞をはずかしく取り、屈折した心情を重層的に形象化しているところに、『風雅集』の本歌取りの特色を見て取ることができる。

なき名ぞと我が心にもこたへばやそのよの夢のかごとばかりは

(新宰相)

夢とてやかたりもせまし人しれず思ふもあかぬよはの名残を
暁をうき物とだにしらざりき枕さだめぬ夢のちぎりは(従三位

客子)

恋ひしなん身をもあはれと誰かいはんいふべき人はつらき世な

れば(西園寺前内大臣女)

これらは、京極派の女流歌人の本歌取りの恋の歌であるが、いずれも本歌の心を素直に取り入れているわけではない。もとの歌の心を正反対に、換言すれば、本歌の趣向を打ち返して取っているところに、作者の知性が作用しており、迫力もあり、読者の知性にも十分訴えるだけの要素を備えている。京極派の本歌の取り方に新鮮味が溢れていることは、この点からも首肯できよう。

さらに一步押し進めたものとさえ思われ、まさしく風雅集のものとなつてゐるということができよう。かように、本歌の詞をひと捻り

たのめこし昨日の桜ふりぬともとはばやあすの雪の木の本(伏見院)

思ひくたすうさもあはれもいくうつり世はあらぬ世の身はもとの身に(同)

ともに、『古今集』の在原業平の「けふこずはあすは雪とそふりなまし消えずは有りと花とみましや」および「月やあらぬ」の歌に本づいて作られたものである。けれども、ここでは、本歌が自家薬籠中のものとなつており、作品の血肉と化しているように思われる。伏見院の——引いては京極派の——本歌取りの最高峯をなしているといつても差支えないであらう。

もとより、伏見院の本歌取りの作品にも、二条派の撰集に採録されてゐるものの中には、

霜深くうつろひ行くを秋の色のかぎりと見する白菊の花(統千載集)

あふことを知らぬ頼みのはかなきはくらせる宵の夢の通路(統後拾遺集)

ひさかたの雲のいづくの影ならで木の間分け行く短夜の月(新千載集)

世とともに胸あひがたきわが恋のたぐひもつらきけふの細布(『新拾遺集』)

木の間洩る影ともいはしよはの月霞むも同じ心づくしを(『新後拾遺集』)

のごとき、趣向のおもしろさはありながら、どちらかといえは、平

分詠をたけの要素を備へてゐる。京極派の本歌の取り方に兼爲が溢れてゐることは、この点からも首肯できよう。

板な取り方に終つてゐるものもある。これらは、比較的初期の作品のように思われるから、まだ為兼の歌論に接しない以前の歌であるかもしれない。はたしてそうならば、このような本歌取りの歌を作つていた伏見院をして、「たのめこし」のごとき作品を詠出せしめるに至らしめた為兼の指導力はまことに偉大なものであったといわざるを得ない。

7

為兼の本歌取りの作品で、勅撰集に見えてゐるのは、次の一首ぐらしいものようだ。

忘れずよ霞のまよりも月のほのかに見てしよはの面影

これは、『統拾遺集』に取られてゐる歌であるから、為兼が新風を樹立する以前の作品で、優艶ではあるが、特にとりたててゐるほどの特色はない。新風を摸索してゐた時期の作品らしいから、このような本歌取りをも試みてゐるのであらう。しかし、二条派に對立する革新的な歌論を確立する過程において、為兼はいさぎよく古歌に縛つて歌を詠む態度から訣別する。『為兼卿和歌抄』に見える、詞にて心を詠まむとすると、心のままに詞の匂ひゆくとは、變れるところあるにこそ。

という有名な文章がそれである。この文については、安田章生博士の詳細な解説(『日本の芸術論』)があるけれども、これは、本歌取りに對する態度にも当てはめて考えることができよう。

「詞にて心を詠まむ」とする態度こそ、まさに二条派のよくする古歌に迫って一首を形象化することであろう。つまり、「表現すべきことがまず存在していて、その伝達の手段として」(『日本の芸術論』)本歌が存在していることになる。為兼はまずこれを否定して、「心のままに詞の匂ひゆく」ことを主張しているのである。これによれば、本歌を取ることは邪道に陥ることになるであろう。本歌によりかかっている限り、「言葉の生み出されると共に、それまでどこにも存在していなかった意味」が生み出されては来ないからである。かかる為兼の指導を受けた京極派の歌人たちに、本歌取りの歌が——『玉葉集』『風雅集』において——少ないのは当然である。

ただ、為兼は、前代の中では、『万葉集』と『新古今集』を重んじているといわれるから、京極派の歌人たちも、『新古今集』の修辭法として特殊な位置を占めている本歌取りをも学んだのであろう。(これは、また、かれらが古歌の一句を裁ち入れて作歌する試みをししばしば試みているのとも深い関連がある)。しかし、京極派の歌人は、為兼の歌論をよく咀嚼していたがために、新古今的な本歌取りとは異なった、玉葉・風雅的な本歌取りともいうべき清新

な手法を確立するに至ったのである。この取り方はまだまだ発展の余地が残されていたのに、『風雅集』を最後として京極派の和歌が消滅したのはまことに惜しむべきことであつた。京極派の和歌の消滅は、引いては新古今的な歌風の消滅をも意味しよう。『風雅集』以降の勅撰集における本歌取りの歌がほとんど見るに耐えないのは前代と同様、「詞にて心を詠む」態度を改めようとしなかったからである。二条家の末流の宗匠は、「またあながち本歌とる事は宜しからぬ事也」(『和歌秘伝抄』)と説きながら、平淡美を墨守し、平板で無気力な本歌取りの歌を作っている。そうした時流のなかで、『玉葉集』『風雅集』のみが、数は少ないけれども、新鮮味のある本歌取りの作品を残しているのである。

私は先に、「勅撰集と本歌取り(一)」において、「本歌取りは、新古今歌風の消長と運命を共にしたることは容易に想像できそうである」と述べておいたが、この予測は幸か不幸か的中するに至つた。玉葉・風雅的な本歌取りの手法は、正徹、心敬に受けつがれてゆく。本歌取りが蘇生するのは、応仁の乱前後の乱世を俟たなければならなかったのである。

(註)小島吉雄博士の御調査による。(本歌取りと新古今和歌集)

本歌取り一覧

万葉集	六四	新統古今一一七五	一三〇	統後拾遺七五八
五一新統古今四三〇	九四	統後拾遺七五三	二七〇	新千載七六七
五七 風雅九三三	九七	新後拾遺一〇二七	三六一	新後拾遺五四九
	一〇七	風雅一〇五五	三九六	玉葉四四五
		新拾遺三二九		新統古今九九二

五七 新統古今四三〇
風雅九三三
一〇七 風雅一〇五五 新拾遺二二九
三九六 玉葉四四五 新統古今九九二

九四〇 新後拾遺九二四
一〇五八 新千載四三六
一〇九二 統千載三二三
一一一四 新千載一五四三
一一三四 新千載五九七 新後拾遺一五三四
一一七三 玉葉三六二
一三八一 新千載二四五
一五〇〇 統千載一七〇〇 新統古今一〇五〇

三四六八 統後拾遺三二九 新拾遺六一
三 三
三八三六 新千載一八〇六
四〇五六 統後拾遺二二九
四三一五 統千載三八六

古今集

なにはづにさくやこのはなふゆごもりいま
ははるべとさくやこの花 統千載五〇
新千載四〇
浅香山影さへ見ゆる山の井の浅き心はわが
思はなくに 統千載二八七・一一五八
三 新千載九二 新後拾遺七七
一二 玉葉一八一・一八二八 統
後拾遺七四 新千載二二〇・
六八三 新拾遺四八 新後拾
遺五八二 新統古今四一・一
六一一

一七 玉葉一七 新統古今一八六
一九 玉葉二〇
二二 統後拾遺一九
二三 新後拾遺一二 新統古今九四
二四 統千載一九二〇 風雅一四八

七〇六 新後拾遺三三 新
統古今一
二八 新拾遺一八八
三〇 統千載一六六〇 風雅二二四
新後拾遺六五
新千載一七〇九 新統古今一
七二

三八 玉葉一二六 新統古今八一七
四一 新千載四三
四四 新拾遺一八一・一二六〇 新
後拾遺一一八
四五 新後拾遺一一八
四七 新後拾遺一一二
五一 新千載一一〇
五二 新拾遺二二〇
五三 風雅二〇四 新後拾遺六一一
五五 統千載一六七六 新後拾遺八
八

一七 玉葉一七 新統古今一八六
一九 玉葉二〇
二二 統後拾遺一九
二三 新後拾遺一二 新統古今九四
二四 統千載一九二〇 風雅一四八

五九 統千載七三
六一 風雅二〇三
六二 風雅三三三 新千載二二〇
六三 風雅二二二 新統古今七一七
七一 新統古今二六四・一六五・一

二三五三 新千載四六八
二五三八 新千載一二五〇
二六四四 統後拾遺一〇〇七
二七七六 新千載六四三
三一一二 統後拾遺八四一
三一九五 新統古今九八六
三四二五 新千載八九四

七二	九三〇	統千載一三九・二〇六 新後拾遺八九 新統古今二二七	一三八	風雅三一八 新千載二一三	一八四	統千載一五二四 統後拾遺二二三 風雅五〇九 新千載二二九 新後拾遺一三七 新統古今四四一・一七一四
七三	九三一	風雅三三一	一三九	風雅一四八九	二一八	統千載五九〇
七五	九三二	統千載一六四 新拾遺一二二	二七八・一七二一 統後拾遺二〇四 新千載二四六 新拾遺二四六・二五〇・二五四	二七八・一七二一 統後拾遺二〇四 新千載二四六 新拾遺二四六・二五〇・二五四	一八九	統後拾遺一三七 新拾遺三八〇
七六	九三三	新統古今一七一	九三	新後拾遺二二六・六九二・六九三	一九〇	統千載八七
八五	九三六	統千載一七四	一四三	風雅三一六	一九一	統千載八七
八六	九三九	風雅三二九 新拾遺八六	一四七	新拾遺一五六三	一九三	風雅一二四
八八	九四〇	新統古今一六二五	一四九	新統古今二六七	一九四	新千載四二二 新統古今四二二
九〇	九四一	新千載一五六 新統古今一七二七	一五二	玉葉二六八四	一九四	二・四九九
九六	九四二	新千載三三	一五六	統後拾遺一七六・一八九	二〇七	新統古今三三三
九七	九四三	風雅一五五二	一六五	風雅二〇〇四 新千載九二〇	二〇七	玉葉五八〇 新後拾遺七三一 新統古今五一四
一一三	九四四	玉葉二四〇 統千載二一〇	一六六	・九二一 新拾遺四一一	二二二	新拾遺八三九
一一〇	九四五	風雅三二七 新統古今一七三	一六六	統千載三〇〇・四七六 風雅三八〇 新千載三九三 新拾遺二二四 新統古今三一二・一七〇八	二二二	新拾遺三三七
一二六	九四六	新千載一七七	一七一	風雅三九六 新統古今三三四	二二二	統千載四〇二 新拾遺三八七
一二八	九四七	新統古今一四五	一七五	新拾遺九四	二二二	新統古今五五五・一四四九
一二八	九四八	新統古今一六七	一七五	玉葉四六六 新千載三二九	一	新拾遺三七四 新統古今五二
一三三	九四九	玉葉二七七	一七五	新拾遺三三九	一	統後拾遺二七九
一三五	九五〇	風雅二九七	一七五	新拾遺三三九	一	統後拾遺二七九
一三六	九五〇	玉葉二七二 統後拾遺一二二	一七五	新拾遺三三九	一	統後拾遺二七九
一三七	九五〇	五 新千載二二六六	一七五	新拾遺三三九	一	統後拾遺二七九
一三七	九五〇	統千載一一 統後拾遺二〇一	一七五	新拾遺三三九	一	統後拾遺二七九

二二六 新拾遺四六八
 六一七 新拾遺九五・四三
 新拾遺一六三・一五四五 新

一三七 新千載一一 統後拾遺二〇一

新拾遺三三九

二二二 統後拾遺二七九

二二六 新拾遺四六八

・六一七 新拾遺九五・四三

新拾遺一六三・一五四五 新

二二九 新拾遺四六八

二 新統古今一八八・六三三

統古今二二八

二四四 新拾遺二八六

玉葉二〇七三

三三三

新統古今七〇六

二四八 風雅四九一 新統古三九九

統千載五八四・五八五・六一

三三六

新千載八八

二四九 統後拾遺三六三・四八九 新

四 新統古今六二八

三四〇

玉葉一〇二一 新統古今六二

五六一・一五九六 新統古今

統後拾遺四七〇 新後拾遺六

三四一

新統古今一四五五

一五一一

三七

三四二

新統古今七七八

二五〇 新千載五二四

新千載二〇七〇

三四三

新統古今七七八

二五三 統後拾遺四二〇 新拾遺五四

新統古今六二七

三四四

新千載二二九七・二三三五・

七・一二五〇

統後拾遺四二八・七六二

二二三六 新拾遺七一三

新統古今五七〇

新千載一七九六 新後拾遺四

三四八

新後拾遺一五〇八

二六〇 新千載一五三六 新統古今一

四九

三四九

統後拾遺一〇八 風雅七四四

〇八九

統千載六一五 統後拾遺四二

七六七

新統古今一七二・七三一・一

二六八 新後拾遺七八五

九 風雅二〇九・七〇六・七

三五一

玉葉一八八五

二七〇 新後拾遺四三三

五九 新千載一八一・一八

三五三

新千載九五九

二七二 新千載四四〇

一二 新拾遺六〇三・六五〇

三五四

玉葉二三八四 風雅一八一四

二七三 新後拾遺四三四・七六三・一

一九

三五五

新後拾遺一五四三

一九八

統千載六四二 新統古今一四

三六〇

統後拾遺四八八

二七四 新千載五三七

一四

三六五

新千載七四七 新統古今五〇

二八三 新千載五五六

新千載八二七

三六八

九・八八九

二九一 新千載五五八

新統古今七〇〇

三七〇

新千載一九一八

二九四 統千載九九七 新千載五七五

統千載一六九 新千載七一

三七〇

新統古今二一六

三七三	統千載五九三 風雅八九二	四一八	玉葉九八五 新後拾遺六一二	四八三	玉葉一三〇六 統後拾遺二五
新拾遺七五二 新統古今一〇二二三	四二〇	新千載一四五	五 新千載一二一三・一三三	四	新後拾遺九五八 新統古今五三一・一三七六・一四五
三七四	新千載二三五〇	四二四	新統古今一〇八二	六	
三七八	統後拾遺五五五	四三九	新統古今一七三七		
三八九	新千載七五七・一〇二四	四五二	新後拾遺四二八	四八四	統千載四三〇・四四〇 統後拾遺四〇六 風雅九五四 新統古今五二四・一六六九
三九二	統千一六九五 統後拾遺四六九 新統古今一三一五	四五三	新千載一二六一		風雅一九七三 新拾遺七七三
四〇三	新千載七〇三	四六三	新拾遺七〇 新統古今九三	四八六	統千載四〇七 新千載四八九
四〇四	玉葉一四八七 統千載二〇九	四六九	新統古今一〇三五	四八九	新拾遺一七三九 新統古今一三六三
	風雅一一一四 新千載六〇四	四七一	統後拾遺一一三八 風雅九〇	四九一	新拾遺九四〇 新統古今一〇五九
	・一六一一 新後拾遺二五六	四七二	新千載一八一 新統古今一九〇五		
四〇五	新統古今二五五・一八六七	四七三	統後拾遺七五一 新後拾遺一〇三三 新統古今七〇四	四九二	新拾遺六四〇
四〇七	新拾遺一一〇八	四七六	統千載一八五・一五三二 風雅九五四 新千載一一三二	四九三	新後拾遺四五三
	四		新統古今一一三	四九七	新統古今四一八
四〇八	玉葉三九一・一二七七		統千載三七二	五〇一	統後拾遺七八七 新統古今一一八四・一一八九・一一九一・一一九二・一一九三・一六九
四〇九	玉葉九二〇 新拾遺三八	四七七	統千載二一 新後拾遺二八		
四一〇	統千載四〇〇 新拾遺八〇四	四七八	新統古今一七七二	五〇三	風雅九七四 新千載五〇三
四一一	新統古今二二三	四八〇	新千載一〇四一 新統古今一五八	五〇四	統千載一〇五七 統後拾遺五
四一二	玉葉一一四九 新拾遺七六六				
	風雅一二五				

四二二

風雅一二五

五八

五〇四

統千載一〇五七 統後拾遺五

六一 新千載一二四六・一二

四七・二二四八 新拾遺九七

七 新後拾遺九四〇・九四一

五〇五 新統古今一六九三

五〇六 統千載一一九四 新後拾遺三

一八・二二七四

五一一 新千載二一一四 新統古今一

五三八

五一三 新千載三四五 新拾遺二八四

・一六四八

五一六 統後拾遺八六二 風雅一一一

〇 新千載一二四七・一五七

七 新拾遺一二三二

五二二 統後拾遺二五八 新後拾遺一

〇二六

五二五 統千載一九一二 統後拾遺七

三七 新千載一一六九 新拾

遺一一〇六・一一〇七

五二六 統後拾遺三六六 新千載一二

六八

五二七 統後拾遺一三〇 新千載一二

五四・一四六九

五二九 統千載三一六

五三〇

五四三

五四八

五五二

五五三

五五四

五五五

五五七

五五八

五五九

五六二

五六五

五七九

六〇一

六〇八

六一一

六一五

新拾遺一二六一

統千載三三八

新後拾遺二六五

新拾遺九九六・一八七四

統後拾遺七三九

風雅一九〇八

統千載五二九・一二九六

統後拾遺一〇二四

玉葉一五八七 新千載一三九五

五 新後拾遺一〇一八

新千載一三九五 新後拾遺一

〇三五

新後拾遺九五五

玉葉九三九 統千載三四三・

一〇八二

新統古今一六六九

新統古今一三九一

新統古今一三一八

統後拾遺七二五 新千載一二

九〇・一四〇四 新統古今一

五一七

新拾遺一〇〇八 新後拾遺七

七〇 新統古今一六一・一

六一六

六一七

六一八

六一七

六一八

六二〇

六二二

六二二

六二二

六二二

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

六二五

三三一

新千載一二七八 新統古今一

〇四九

統千載一二五七

玉葉一三五四 新千載一一九

八

統千載六七

新後拾遺三六六 新統古今三

八六・一一二〇

統千載一一八六 新拾遺一三

一〇 新統古今一四九四

統千載二三五・二三六四・一

八七一 風雅一一一〇・一一二

八六 新千載一三六六・二二

二二 新拾遺二一七・四五八

・一二〇一 新統古今六一七

・一三〇八・一九三一

統千載一一〇四 統後拾遺七

五九 新千載四三九・一六一

八 新後拾遺一三九

統千載一三七一・一四六三

統後拾遺五九八 新千載四四

八・一三〇一 新拾遺六一四

六三五
四
風雅四五九 新統古今一七〇
古今一二四六・一二四七 新統
遺一〇三六・一一七七

六六五
六六九
六七〇

新拾遺一七一五
統後拾遺九二九
統千載一〇五七 新千載一二
四六・一二四七・一二四八
新拾遺九七七 新後拾遺九四
〇・九四一 新統古今一〇六
〇

六三六
六三八
六四四

新統古今一二六一
新拾遺二二三二
統千載二〇三〇 風雅一九〇
〇 新千載二〇九一 新拾遺
一二七二・一八八〇 新統古
今一四〇一

六七四
六七六
六七七

新千載一三九七
新千載一二四八 新拾遺九七
七 新後拾遺七二三
統千載一三九五
統千載六九八
新千載七一七 新拾遺九八五
新拾遺一三二八
玉葉八二七 統千載五一三
統後拾遺三二六・一〇三八
新千載五二三・六二七・六二
八・六二九 新拾遺三二・二
二八・一〇八二 新後拾遺一
二 新統古今二二・二九四・
四五〇・一七四四・一七四五
統千載一三二三 風雅一〇四
六 新統古今一二三二

六四五
六四七

新拾遺八六七
統後拾遺二一七 風雅一〇八
七 新千載二二五五 新拾遺
一一六七 新後拾遺一四三四
新統古今三三九・八七二

六八九
六八六
六八〇
六七九

新千載一三九七
新千載一二四八 新拾遺九七
七 新後拾遺七二三
統千載一三九五
統千載六九八
新千載七一七 新拾遺九八五
新拾遺一三二八
玉葉八二七 統千載五一三
統後拾遺三二六・一〇三八
新千載五二三・六二七・六二
八・六二九 新拾遺三二・二
二八・一〇八二 新後拾遺一
二 新統古今二二・二九四・
四五〇・一七四四・一七四五
統千載一三二三 風雅一〇四
六 新統古今一二三二

六四九

統千載八〇六 統後拾遺八二
五

六九〇

新千載一〇三三・一一二八
統後拾遺一一一五 新千載一
四五二・一六一八・一六一九
新拾遺二六五
新千載一四〇二

六六二

新千載一四〇二

六九一

統千載五一三・一五〇三 統
後拾遺八一・八七〇 新千
載一三六二 新統古今一二六
三
玉葉一二五・五八五 風雅一
〇四七 新拾遺一七九二
統千載一三一九 新千載六五
一 新後拾遺七六一
新千載六一四 新拾遺五三
五 玉葉二四四九
新千載二四〇
統千載一三二八・一四三七
新後拾遺二八一
統後拾遺八一九 新千載三〇
七 新拾遺三〇六 新統古今
一一八八・一一八九
新千載一四八六 新後拾遺七
八三
統千載一二八七 統後拾遺二
五二・四一五 新千載一三二
三 新拾遺一三三九
統後拾遺九四四
統千載一四七九 新統古今一

六九二

六九三

六九七

六九八

七〇〇

七〇五

七〇六

七〇七

七〇九

七一二

七一五

七二七

四一八

七四六

新後拾遺一二三二

七八二

統千載一四三八

六六二 新拾遺二六五
新千載一四〇二
六九〇 統千載一三三三 風雅一〇四
六 新統古今一二三三
七一五 新後拾遺九四四
七二七 統千載一四七九 新統古今一

七三二 四一八
統後拾遺二〇九 新拾遺一〇
七四六 新後拾遺一二三二
七四七 玉葉一九七四 統千載一六五
七九二 統千載一四三八
七九四 統後拾遺一八九・八九二 新
七九七 統古今一六七四

七二四 統後拾遺六七二 新千載三六
七 新拾遺三一・九四八 新
七九七 統後拾遺三六四
七九三 統千載一四七四 風雅一六〇
三 新千載二六九・一六二三
新統古今一九二九

七二五 新千載五四二
統千載一五六五・一五六六・
七九七 新統古今一一四七・一二〇七
・一四〇六
新千載一五六三 新統古今一
四六二

七二七 一五八〇 新千載六六七 新
拾遺一三二五 新後拾遺一二
八〇二 新千載一五六三 新統古今一
四六二

四八・一二四九 新統古今一
一〇三・一四一〇・一四八四
八〇七 統千載一五七二 新拾遺一〇
五一

・一四九二・一四九三・一八
一一
七六一 新拾遺一三七一・一六五五
新後拾遺一〇二六 新統古今
一九七六

七三三 新拾遺六七〇 新統古今四六
七六二 新千載一七二〇
八二二 統後拾遺九五
一

七三四 八
新統古今一九六四
七六四 統千載一四七一
八二二 新拾遺一二九五・一六二一
七三六 新後拾遺一二三三
七七五 新統古今九六・一二二八・一
二二九

七三七 統後拾遺一二四八 新後拾遺
七七九 新統古今二一三四
八二四 統後拾遺八九八 新統古今一
六五六 新拾遺一二二六 新後拾遺一
五四五

七四三 玉葉一四六七
八二六 統後拾遺一一七〇

八二八

統千載一二五九 統後拾遺七

八七九

玉葉一〇三〇 統千載一八一

九〇九

玉葉二二〇三 新拾遺四六五

九六

新千載一三三五 新拾

三

統後拾遺三五四・一〇四

九一〇

新統古今一六三四・一九四七

遺一〇四八

新後拾遺四 新

四

新千載四二三・七二八・

九一一

新統古今一九一四

統古今一五五・一九一・一〇

六三・一九二八

一七六九・一八四六・一八五

七 新拾遺一七五六・一七八

九二七

統千載四七九 統後拾遺九〇

風雅一八九〇・一九〇〇

新千載二二六〇

四〇八・四〇九・一三七七

九 新後拾遺二四四・四〇七

九三〇

新後拾遺五六二

新千載二二六二

新統古今七二一・一八一

新統古今七二一・一八一

二 新後拾遺九四六

九三三

新千載二八一・一〇七六

統千載二六六

統千載四三二

統後拾遺四五三

新千載二九

玉葉九四四

統千載一四五三

一六七〇

新統古今六一

新統古今一七八

統千載一九六五

新拾遺二二

風雅三五二・二〇四八 新千

一一四・一〇一八

風雅二五二・二二五四

八八六

新統古今一九二・一

五九

新後拾遺一一九二・一

載一六七〇

新千

八八七

一九三

玉葉一七〇三

新統古今一六

統後拾遺一六九

新統古今二

七三

新統古今一八〇一

九三四

新統古今一四六六・一八八五

一〇五

玉葉一〇一八

八八九

新統古今一八〇一

九三五

新千載一六八九

統後拾遺一一二八

風雅八七

八九五

新後拾遺五七五

新統古今一

八八

二 新後拾遺三六二

風雅一一二二

八八九

新統古今一四四六

九三八

統後拾遺一一五八

九

新後拾遺一二七七

九〇一

玉葉二三八

六四・一三七二

新後拾遺一

統千載一〇七五

統千載二八九

九〇三

風雅二三五

九四三

新統古今一九三三

風雅一一二二

新後拾遺九六

九〇四

風雅六六二

新拾遺一〇八二

新千載一八二三

新後拾遺一二七七

統千載一〇七五

九〇三

風雅二三五

九四三

新統古今一九三三

統千載二八九

統千載二八九

九〇四

風雅六六二

新拾遺一〇八二

新千載一八二三

新統古今一八五五

新拾遺一〇四〇

九八二

新拾遺一〇四〇

一〇一一

新拾遺一九〇四

新統古今一八五五

新拾遺一〇四〇

九八二

新拾遺一〇四〇

一〇一一

新拾遺一九〇四

八七五 統千載一〇七五 九〇三 風雅二三五 九四三 新統古今一九三三
 八七八 統千載二八九 九〇四 風雅六六一 新拾遺一〇八二 九四五 新千載一八二三 新拾遺一五

九一〇 九七七 新統古今一八五五 九八二 新拾遺一〇四〇 一〇一一 新拾遺一九〇四
 九一〇 統千載二〇二三 九八三 玉葉二二四六 新千載一〇四 一〇二五 新統古今一三〇七
 九五一 新千載三五九 新統古今一八 四 一〇二三 新後拾遺七九七
 六四 新千載一八五四 一〇二八 新千載一一二〇 新拾遺九八

九五二 新統古今一八七六 九八四 新千載一八五四 一〇三五 新後拾遺九六一
 九五五 玉葉二〇〇五 統千載一八二 九八五 新千載一五四九 一〇三二 新後拾遺九四三
 五 新千載二〇九四 新拾遺 九九五 新後拾遺四五一 新統古今二 一〇四二 新統古今一〇四二
 一五九九 四六 一〇五五 新統古今一五四九 一〇五五 新統古今一五四九

九五六 新後拾遺三二四 九九七 新拾遺一〇七三 新統古今八 一〇五六 統千載一八〇四 新後拾遺一
 九五九 新千載一九九八 新後拾遺八 三八 三 一〇六三 統千載七〇七 統後拾遺一一
 一八 一〇〇〇 新千載一四六九 新統古今一 一〇六三 統千載七〇七 統後拾遺一一
 九六五 統千載二〇一三 七〇三 六〇

九六六 統千載一六九一 一〇〇一 風雅一一九四 新千載一一二 一〇七〇 新統古今二九五
 九六七 新千載一九九九 一〇〇二 七・一四五三 新拾遺九八二 一〇七二 新統古今七二五
 九六八 新後拾遺三八〇 一〇〇三 新統古今四六四 一〇七五 新統古今六八七
 九六九 新統古今五三〇 一〇〇三 新千載一九五六 新統古今一 一〇七六 統後拾遺四七六
 九七一 統千載四七七 新拾遺三七六 九〇二 新千載一九五六 新統古今一 一〇七七 新統古今四四二
 九七二 統千載一四二六 新拾遺三七 七〇二 統千載六五九 新千載六四四 一〇七九 新後拾遺二二三・二七六・一
 一九一

九七七 新後拾遺一四〇六 一〇〇六 玉葉二三五一・二三五二 一〇八〇 玉葉三六三 統千載一二四三
 九八一 新拾遺一二九七 新統古今二 一〇〇九 新拾遺一二六八 新統古今一 一〇八四 統後拾遺二三八 新千載四三
 〇〇七 四〇八・一四〇九 一〇八四 風雅一七九〇 七 新統古今七三九

一〇八六

新統古今七〇三

拾遺二二三五・一二三六

・六五八・一六〇三 新後拾

一〇九一

新千載二六二 新統古今三二二

六九八

九・九〇六

後撰集

六二〇

新後拾遺三九四 新統古今二〇一八

一〇九二

統後拾遺一一一三 新千載一

一七

風雅一三三

七〇一

新後拾一〇三二

一八八・一二二七 新拾遺一

四八

新統古今一九九五

七二六

風雅一〇〇八

〇八四 新後拾遺九九八・九九九

六四

玉葉一八八四

七四三

新千載一六五六

統千載一五五一・一五五二・一五五三 統後拾遺八七三・八七四

七二

新拾遺二六五九

七五八

玉葉一四八二

一五五三 統後拾遺八七三・八七四 新千載一五九二・一九二二

一〇三

玉葉一一二・一二六

七七七

新後拾遺八三・七八二 新統古今六三〇

九二二 新拾遺一二五一 新後拾遺一五六・四〇二・五七四・一六八・一六九 新

一四五

新後拾遺四五八

八六三

統後拾遺七六四

統古今三・二二三・七四〇・九四五・一二四二

二〇七

新拾遺一五七三

九一七

新拾遺一七三八

新拾遺一八二八 新統古今一七六六

二〇九

玉葉一八八四 統千載一〇六

九五〇

新千載一〇八〇

統後拾遺一一〇六

二二九

新拾遺三三三

九六一

新千載七三三 新後拾遺一〇一三 新統古今八五

新千載一二三九

二五二

玉葉五七九・一六二一 風雅三九〇・三九一

一〇七六

統後拾遺六〇六 新統古今二七五・一五六二

統千載一四九四 新後拾遺六六五・一一〇二

四四五

統千載五九八 新拾遺五六九

一〇八一

新拾遺一一四七 新後拾遺四一七

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

五一〇

新統古今一九九四

一〇九〇

新千載一四一六 新後拾遺八六〇 新統古今五四五

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

五二六

統後拾遺一〇八六

一〇九一

新千載一九五六

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

五七八

統千載一〇八〇 統後拾遺三四七・三六一 新拾遺三八一

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

四七・三六一 新拾遺三八一

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

統千載一五八一 統後拾遺九三一 新千載一五六一 新後

一〇九四

一〇九四

新統古今二〇二

新統古今一八一九・二〇

一一一 統千載一五八一 統後拾遺九
 三一 新千載一五六一 新後
 五七八
 統千載一〇八〇 統後拾遺三
 四七・三六一 新拾遺三八一
 一〇九一 新千載一九五六
 新統古今二〇二

一一〇三 風雅一九三三 一四五 統後拾遺二五〇
 一一九二 統千載一七九四 一七一 新統古今四四九
 一一九七 玉葉九四九 統後拾遺一〇二 一七八 新後拾遺三一六
 二二四一 七 新千三九四 一八三 玉葉五七五
 一一四三 新千載一二一五 新後拾遺四 一八四 新拾遺九六一
 一一三三 九四 一九〇 新千載二五 新統古今四九二
 一一三六 風雅九四四 二二二 新千載五六〇 新拾遺四一二
 八 統後拾遺九〇 新千載一九九 二二四 新千載一七九四
 二二七 統千載三一九 新統古今一七
 八三

拾遺集 二五〇 新後拾遺八
 一 玉葉三〇 二五二 新統古今六九七
 六 玉葉四一 三〇六 玉葉二〇二八
 一五 統千載四八 新拾遺五二 四三二 統千四七〇
 二一 新統古今一〇五八 四四五 玉葉一〇七六
 二四 玉葉一三 四七〇 新千載九一五
 六四 玉葉二四三 統千載一七〇 四八三 新千載一五五
 一三一 風雅二二五 四八八 新後拾遺三七九
 一三四 新後拾遺七七五 四八九 新後拾遺二一四 新拾遺六六
 一三五 新後拾遺七四二 四九一 六 新後拾遺一〇四・一二七

一四四 統後拾遺二五〇
 一七一 新統古今四四九
 一七八 新後拾遺三一六
 一八三 玉葉五七五
 一八四 新拾遺九六一
 一九〇 新千載二五 新統古今四九二
 二二二 新千載五六〇 新拾遺四一二
 二二四 新千載一七九四
 二二七 統千載三一九 新統古今一七
 八三
 二五〇 新後拾遺八
 二五二 新統古今六九七
 三〇六 玉葉二〇二八
 四三二 統千四七〇
 四四五 玉葉一〇七六
 四七〇 新千載九一五
 四八三 新千載一五五
 四八八 新後拾遺三七九
 四八九 新後拾遺二一四 新拾遺六六
 四九一 六 新後拾遺一〇四・一二七

一〇九一 新千載一九五六
 新統古今二〇二
 一一九 新統古今一八一九・二〇
 四九
 一一九 風雅一九二九
 一二七 統千載九二七
 一三三 統後拾遺六七八
 一四〇 統後拾遺七二二・七八九
 一四七 風雅一八三三
 一五四 新後拾遺一一五四
 一六二 新千載一三七五 新後拾遺一
 一七一 一〇一 新統古今一二二九・
 一二三〇・一二三二

七八二 新拾遺三八八・一一五三
 七九八 新千載一九九五
 八〇七 新拾遺二二九九
 八四八 統後拾遺八一 新千載一三
 四〇 新拾遺一一〇五・一一
 三五・一一六〇 新統古今一
 二二六・一二二七
 八五三 統千載一四〇八 新拾遺七四
 七・七四八・一〇二三

七八二 新拾遺三八八・一一五三
 七九八 新千載一九九五
 八〇七 新拾遺二二九九
 八四八 統後拾遺八一 新千載一三
 四〇 新拾遺一一〇五・一一
 三五・一一六〇 新統古今一
 二二六・一二二七
 八五三 統千載一四〇八 新拾遺七四
 七・七四八・一〇二三

八五六 玉葉二〇八八 新拾遺八二四

八七〇 新統古今一四二二

八九七 風雅一一一四

九〇一 新千載一一六八

九〇一 新千載一二五五 新統古今六

九五〇 五〇・一四七一

九六七 風雅一三五三

九六七 風雅九一三・一七〇七 新千載一四八一 新統古今一〇六・一三六四

九六九 統後拾遺七七九 新拾遺八二

九九〇 統後拾遺一一三三

一〇五五 新千載一一四

一〇七七 統千載二五一

一二〇一 新千載三三九・五〇一

一二四三 新拾遺三四〇 新後拾遺一四六八 新統古今五三九・五四〇

一二九九 玉葉一五七四 統千載二〇八九 新千載九〇四・二二七一

一三二七 新拾遺三八

一三二九 新統古今四九九

一三五〇 新千載二二五六
一三五二 新千載九一九・二三三九

後拾遺集

四三 風雅一四二二

二一九 新千載一三九七

五一八 新拾遺七八三・七八四 新統古今九四三

六二六 新千載一二五九 新拾遺二〇二八

六五一 新千載一三二四 新拾遺二〇五八

六八〇 統千載五五七

六九一 統後拾遺五八八・七九一 新拾遺五一四

七六六 風雅一三三七

一〇四二 統千載一〇四二 新拾遺七六二 新統古今一〇四二

一〇五九 新拾遺一七六四

一一六五 統千載一〇四二 新千載一一九七

一二二七 新統古今二〇七〇

金葉集

二八八 統後拾遺五九〇

四五三 新拾遺集一〇九四

五六八 玉葉二〇一七

五八六 新後拾遺二五一

詞花集

八一 統千載一七四九 統後拾遺三九六 新拾遺二三〇 新統古今七〇七

八四 風雅四五・四六二

二七五 新拾遺一二四

千載集

一一三 新千載一八五

一三六 新後拾遺一六三

二〇二 統千載一〇六五

四一九 風雅六四六

四二二 新千載七一九

六四〇 新千載九二四・九二五 新統

古今一三五〇・一六二七

四九八

玉葉五九〇

新統古今二〇

一三二七 新拾遺三八
 一三二九 新統古今四九九
 一二一七 新統古今二〇七〇
 九七
 新統古今二〇七〇
 四二二
 新千載七一九
 六四〇
 新千載九二四・九二五 新統

古今一三五〇・一六二七
 七〇三 統後拾遺七二二
 八〇六 統後拾遺八二四
 一〇二二 統千載一八九六
 一一三四 新千載一六六四
 一一五七 風雅一七九二
 四九八 玉葉五九〇
 五八二 風雅六六八
 六二〇 統後拾遺四五二 新拾遺四二二
 六四四 新後拾遺一三一八
 六五四 玉葉一八二〇 統千載六三八
 六五七 新統古今二一九
 七七七 玉葉五六一
 統千載二〇五一 新拾遺九〇
 九 新後拾遺一四五八 新統
 古今一五七八
 新千載二二六七
 統千載二〇九三 新統古今一
 五九四
 統千載一一二五・一七三七
 風雅一二一三 新統古今六八
 一・一五一四
 新千載五〇四 新拾遺一五七
 七
 新千載八〇六
 統千載六三八 新統古今九七
 三
 統千載八四四 新拾遺九八八
 九〇九
 九一〇
 九一一
 九一九〇
 九〇九
 新統古今二〇
 玉葉一五六一 新千載八一八
 新拾遺八一八 新統古今一六
 〇五
 新後拾遺六一八
 玉葉一二〇四
 新拾遺八四二・八四三
 統千載三八・一〇三・六〇一
 ・一三三〇・一七六八・一七
 八七 統後拾遺七九・六三六
 新千載七六・一一一 新拾遺
 二八九・五三〇・八一四・七
 二七・一七一六 新後拾遺七
 四〇 新統古今一三六・四四
 三・九五六・一三四六
 新拾遺九三六
 統千載三九一 新千載九・一
 〇四七 新拾遺三一 新統古
 今二五四
 統後拾遺七八〇
 新拾遺一三〇九
 新千載一四三六 新拾遺一一
 九三 新統古今七三一・一八

新古今集

一一 新千載二九
 一一 統千載二二
 二一 統千載一五
 二九 新千載六〇九 新後拾遺一四
 五五 〇
 統千載七四
 風雅七四三
 一〇八 統後拾遺二六 新後拾遺三五
 一七五 新後拾遺二九〇
 二八三 玉葉五七三 統後拾遺二六九
 三四六 ・八二三・八六五 新拾遺四
 五二 新後拾遺三一二・四八
 六 新統古今三三七
 四五九 統千載四二三 新千載四七〇
 九〇三 統千載八四四 新拾遺九八八
 八五九
 八五〇
 七八九
 七八九
 八五〇
 五九四
 統千載一一二五・一七三七
 風雅一二一三 新統古今六八
 一・一五一四
 新千載五〇四 新拾遺一五七
 七
 新千載八〇六
 統千載六三八 新統古今九七
 三
 統千載八四四 新拾遺九八八
 九〇三
 九〇〇
 八九九
 八九九
 九〇〇
 三
 統千載八四四 新拾遺九八八
 九〇三
 九〇九
 九一〇
 九一一
 九一九〇
 九〇九
 新統古今二〇
 玉葉一五六一 新千載八一八
 新拾遺八一八 新統古今一六
 〇五
 新後拾遺六一八
 玉葉一二〇四
 新拾遺八四二・八四三
 統千載三八・一〇三・六〇一
 ・一三三〇・一七六八・一七
 八七 統後拾遺七九・六三六
 新千載七六・一一一 新拾遺
 二八九・五三〇・八一四・七
 二七・一七一六 新後拾遺七
 四〇 新統古今一三六・四四
 三・九五六・一三四六
 新拾遺九三六
 統千載三九一 新千載九・一
 〇四七 新拾遺三一 新統古
 今二五四
 統後拾遺七八〇
 新拾遺一三〇九
 新千載一四三六 新拾遺一一
 九三 新統古今七三一・一八

二七

- 一〇五二 新統古今一一一六
- 一〇七一 統後拾遺三三四
- 一一五一 新千載一〇七二
- 一一五九 風雅一〇八九 新千載一四二
- 八
- 一一九一 新拾遺七五四
- 一二〇七 新後拾遺一〇九二
- 一二一〇 新拾遺一三一五
- 一三五七 統千載一〇九五・一〇九六
- 一三六七 統後拾遺七六二 新拾遺一〇三一
- 一三六八 統後拾遺八一七
- 一三七七 新後拾遺六一〇
- 一四三二 玉葉九二六 統後拾遺八五六
- 一四三二 新千載四四六・一四八一
- 一四三二 新千載七二三・一二三三
- 一四三二 新千載六七八
- 一五八九 統後拾遺三九五 新千載二八九・六六五 新拾遺一五七七
- 一六一四 新統古今一〇四・五三五
- 統千載三九・一一七一 風雅三七・二九八 新拾遺二七

一六四八

一七〇〇

一七〇一

一七〇五

一七一六

一七二〇

一八五五

一九一六

一 新統古今七

- 玉葉八八九 統千載六四六・六四七 新千載六二七
- 統千載一七五九 新統古今七
- 一三
- 新統古今一八八三
- 新統古今一三五八
- 新後拾遺二二八
- 玉葉一九四二
- 統千載八七一 新千載九九二
- 新拾遺一一〇〇 新後拾遺四八四 新統古今三三四
- 風雅三五六

新 勅 撰 集

四五六

四九二

四九五

四九六

四九六

四九九

五〇〇

六三〇

六三七

七二七

七三四

七三六

八八一

八八三

九四四

九五五

一〇四二

一三四四

九二二

統 古 今 集

- 新千載二九七
- 新拾遺八一
- 新千載一〇四六・一二八八
- 新千載一一一三
- 風雅一一六
- 統後拾遺九〇九
- 新拾遺一三三二 新統古今一五五四
- 統千載一四五七
- 統千載八四一
- 統後拾遺一一七三 新千載一〇四八 新拾遺九四三 新後拾遺一四二・九五〇 新統古今一一〇四
- 新千載一一四九
- 新後拾遺一四四三
- 新千載一四〇一
- 新後拾遺三四六 新統古今七一一
- 新統古今九五二

古今和歌六帖

源氏物語

一七一八

新統古今一四三二

一六二四 続千載三九・一一七一 風雅
三七・二九八 新拾遺二七

四九五 新千載六七六
四九六 続千載五四三

一一二
九三二 新統古今九五二

古今和歌六帖

源氏物語

一七一八 新統古今一四三二

三三四二一 続後拾遺五七一
三三四九四 風雅一八八一

七七六 新統古今五七六
七八一 風雅一三二二
七八五 新千載一五〇五
七八六 新統古今一五二二

和漢朗詠集

伊勢物語

七九二 風雅一九五八
八一 風雅一五七
八二〇 新後拾遺九〇五・一四三九
八六三 新拾遺一七一三
八七五 続千載一〇三八
九五九 続千載八四六 新統古今五一

一九 新千載一一三八・一七六六・
一七九一 新後拾遺六一三

九六四 新統古今一四三一
一〇二八 続千載四七八 風雅四九一
新後拾遺七五四 新統古今一
四三一

二九 新統古今一〇〇一
続後拾遺五二 新後拾遺二三
二・五九九 新統古今一六三

九 新統古今一四三一
続千載六一九

なつのをねぬにあけぬといひおきしひと
はものをやおもはざりけむ 新千載四〇六
新統古今二三三
みわがはのきよきながれにすぎでしわが
なをさらにまたやけがさむ 新千載九一七
新拾遺一七六五
やまざくらあくまでいろをみつるかなはな
ちるべくもかぜふかぬよに 続千載一四四

三〇 続後拾遺五二 新後拾遺二三
二・五九九 新統古今一六三

一四六五 続千載六一九

五九 続後拾遺九〇七

狭衣物語

六一 新統古今一三二二

一四六五 続千載六一九

六七 続千載一四九一

八〇 玉葉一七一三 新統古今二八
〇・八八〇・一四二〇

一九一 新千載一五六〇

一五七三 玉葉一二〇七
一六四五 続千載三六一